

Title	加藤哲弘・中川理・並木誠士(編)『東山/京都風景論』
Author(s)	清水, 愛子
Citation	デザイン理論. 2006, 49, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53284">https://doi.org/10.18910/53284</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

加藤哲弘・中川理・並木誠士編

『東山／京都風景論』

昭和堂 2006年

清水愛子／京都造形芸術大学非常勤講師

本書は、「景観？研究会」における長年の成果の一つとして出版されたものである。「景観？研究会」とは、その名の通り「景観」という言葉に疑問符を投げかけ、その内実や可能性を探るべく結成された会である。本書は、数ある景観の中でも東山に焦点を絞っている。東山とは、一般に比叡山から稻荷山まで南北に連なる京都盆地の東側の山地を指し、「東山三十六峰」と称され親しまれてきた山々を意味する。

本書の特徴を大別すると三つの要素に分けられるだろう。第一に学際性である。美学、美術史、庭園史、都市史、文化財保護政策、建築史、景観工学といった幅広い分野の研究者らが寄稿することで、多様な観点から東山についての論考が試みられている。第二に、東山の風景を論じるにあたり、単に東山の魅力や美しさを語るものではなく、過去の事例をもとに「東山の風景に見出される多様で豊かな様態」を示したところである。第三に、景観を考える際に、今日の景観だけでなく、これから先の景観も念頭おくことを前提としている点である。つまり、分析する視点や時系列の対象を広く設定することにより、近視眼的になりがちな昨今の「景観」論争に対して警笛を鳴らすものだといえよう。

以下、各章の概要を述べることで、本書が提起した警鐘の再現を試みたい。

第一章は、美学の立場から加藤哲弘氏による「東山から考える——景観論・風景論」である。ここでは、第二章以下の「東山」という具体的な事例による論考へ進む前に、本書

の指針が示されている。まず、「景観」という語の基本的な意味、次に「景観」の構成要素、最後に「景観」を語る時の注意事項という「景観」一般についての基本的な了解事項や問題点が述べられている。

第二章は、本会員の並木誠士氏による「描かれた東山——景観史と美術史の間で——」である。『洛中洛外図』、『東山遊楽図』、『仮名草紙』、『吾妻鏡』など過去の文学や絵画作品を対象とし、それぞれの時代の東山の様子や人々の東山イメージを読み解いている。その結果、平安時代後半から「東山」という語が用いられ、江戸時代には紅葉や花見を行う桜の名所としての「東山イメージ」が人々の間で共有されていたことが明らかにされる。つねに東山は、眺め、散策する対象として、京都の人々にとって身近な名所であり、重要な存在であったことを示している。

第三章は、建築史の立場から矢ヶ崎善太郎による「趣味世界としての東山——東山でおこなわれた茶会をめぐって——」である。近代に入ると東山一帯では大寄茶会が盛んに行われるようになる。その要因として、東山がもつ歴史的環境や自然環境に加えて、近代に官僚や財界人の別邸・邸宅地が新たに形成されることで、数寄空間が成立し、茶会に必要な環境がそなわっていたことを指摘している。さらに、この茶会の開催によって「東山の建築・庭園の造営・整備に拍車」がかかり、「近代の環境形成のきっかけ」となっていく。このように、東山地域の環境整備が進められた背景には煎茶や近代の茶会が志向する空間性の影響があったと考察している。

第四章は、本会会員の笠原一人氏による「背景としての東山——第四回内国勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭を通じて——」である。明治28年、背後に東山を望む岡崎地域は第四回内国博覧会、及び平安遷都千百年記念祭の会場となる。その結果、国家を表象する空間として歴史イメージによる演出が進んだ東山は、京都の人々が育んできた生活文化の舞台としてではなく、あくまでも演出の「背景」を構成する役割としてメディアを通じて視覚化され、京都の「外」へ流通されていく。その構図は今日でも変わっていないと指摘している。

第五章は、庭園史の立場から丸山宏氏による「守られた東山——名勝保護政策をめぐる——」である。近代以前の東山の多くは、社寺が社寺林として維持管理をしてきた。東山は、「都市住民・農民が建築材、燃料、肥料を収奪しながら維持」され、「自然と人間の収奪の微妙なバランスの上に成り立ってきた」。それが明治維新になると、社寺林は、地租改正によって、上地され官有林となり、荒廃が進行する。こうした状況に対し、明治期にはじまる行政側の保護政策を詳細にみることによって名勝地や風致林として東山が保護されていく様子を明らかにしている。

第六章は、景観工学の立場から出村嘉史による「景観としての東山——近代における神楽岡地域の再構成——」である。東山の「神楽岡」地域は、近世において「非日常を堪能する場」であったが、近代になり宅地開発が進むと、茶人谷川茂庵による茶室や庭園などの数寄空や、山辺地域の地形を生かした住宅地がつくられるなど、「良質の風景が日常的な場へと還元され」、地域全体が再構成されていく。この近代における再構成の要として「茂庵の茶会」、「茂庵の庭園」、「谷川住宅」などの事例が挙げられている。

第七章は、都市史の立場から、中嶋節子氏による「管理された東山——近代の景観意識と森林施業——」である。行政による森林管理がはじまった近代の東山において、名勝地保護や都市計画という政策が執行される過程で生じた景観にまつわる様々な論議に着目する。これらの論議から、近代が求めた景観は、「計画」という行為を通して科学的に創造していくことであり、それは「景観という概念の根拠それ自体の変容を意味していた」と結論付けている。

第八章は、都市史の立場から中川理氏による「東山をめぐる二つの価値観」である。昭和2年に永田兵三郎と市村光恵の間で繰り広げられた東山をめぐる論争が取り上げられている。この論争は、東山の開発か保存かという単純な議論ではなく、ともに近代が生み出した風景に関する二つの価値をめぐるものとして位置づけられている。そして、そこから近代における風景の認識の揺れ幅を読み取っている。さらにこの論考では、東山を風景論の観点から論じていくことの有効性が示されている。

最後に「東山の議論から見えてくること」として編集者3名によるそれぞれの結論が述べられている。ここで注目したいのが、本書が「東山」を題材として一つの結論を導くことを目標としていないところである。「景観」をめぐる議論の多様さそのものを提示することで、現在の場所性が喪失し矮小化された「景観」論争に警笛を鳴らしている。最後に、このような議論の多様さこそ、場所と歴史を媒介する「景観」という概念の本来的な豊かさを示していることを指摘して締め括っている。